

お嬢様の喉奥で、ペニスが脈動し、射精を目前にしたペニスが硬度を増した。苦しさのあまり不器用に暴れたお嬢様の歯がかすかに当たり、肉茎がチリッと痛む。そのとたん金縛りが解けた。

「ウウウウッ!!」

「うわっ。ご、ごめんっ。出てしまうっ」

ようやくのことで、薔子の後頭部を押さえている手を動かすことに成功する。

薔子が首を振りながらペニスをもぎ離すのと、尿道口を押しひろげた精液が発射されるのは同時だった。

「きゃあっ」

「うわっ、わああああつ、で、出るうっ!! ご、ごめんっ、薔子様っ、うっ、うううっ」

ドクッ、ドクドクッ!!

ついに射精がはじまった。白濁液が薔子の綺麗な顔を液体の弾丸のように打ち抜いていく。ペニスは不規則に動き、お嬢様の顔を汚していく。

お嬢様は射精の瞬間、とっさに瞳を閉じた。

まぶた
瞼を打ち抜く精液は、頬を汚し、おでこ形びりようのよい鼻梁を伝って顎からしたたって

いく。

紅いドレスの胸もとに生まれた白い点が、大きくなっていく様子に興奮する。

空に向かって浮かびあがるような、地の底に向かって落下するような射精の快感にひたっていたら、ありえないことが起こった。薔子が口を開き、射精途中の肉の実を口腔に含んだのだ。

温かく複雑なお嬢様のお口の感触に、いったん弱まっていた射精の勢いが再び増した。

ドレスを汚すよりは吞んでしまうほうがいいと思ったのだろう。薔子は舌を丸めて精液を受けとめ、勢いを殺すと、口腔に溜まる精液を喉を鳴らして吞みこんでいく。

「うあつ、うあああつ。ああああつ」

射精中で敏感になっている先端の肉の実を、舌の腹がうごめきながら圧迫し、ざらついた上顎に密着させる感触と、ペニスごとを引っ張られるような吸引感に、悲鳴をあげてしまう。

薔子は、輸精管に残っている最後の一滴までも吸い取ってから、ちゅぽつと音をたてて亀頭をはずした。

そしてその場にぺったりと座りこみ、精も根もつき果てたとばかりにはあはあと息



をする。

射精が終わると同時に冷静さが戻ってしまった直樹は、気丈なお嬢様の弱々しい様子に罪悪感を感じてしまい、蕎子に向かってあやまってしまった。

「ご、ごめん。その……っ、つい、とまらなく、なってしまった」

お嬢様はキツとした瞳で直樹を見た。

「あやまらないでほしいのよっ!!」

「ご、ごめん」

「許せませんっ……」

「どうしたら許してくれるの?」

「わ、私を、だ、抱けば、許してあげます……」

ゆらゆらと揺れる長いまつげに、自分が放った白濁液が水滴状についているのが見て取れた。恥ずかしそうに目を伏せているお嬢様は、セクシーでかわいらしい。直樹は、お嬢様の顔に残った精液を指の腹で拭い取った。蕎子がまぶしそうに目を細める。

「セックスしていいの? ほ、ほんとうに?」

蕎子はムツとした表情を浮かべ、直樹の手を取ると、自分の乳房へと誘った。

このドレスは、どうぞおっぱいをいじってください、とおねだりしているようなデ

ザインだ。鎖骨に沿って手をさげていくとじかに乳房を揉めてしまう。

「あつ、ンッ、くっ」

ドレスのなかに手を入れ、自分の足もとにひざまずくお嬢様の乳房をそつといじると、薔子の上半身がせつなげにくねる。

——乳首、勃起してる……。

米粒ほどの小さな乳首がコリコリと硬い感触になっている。お嬢様が興奮していることは間違いない。

力を入れすぎてしまったのだろうか。お嬢様が、伸びあがるような仕草をした。

「い、痛いっ……くっ」

「うわっ。ご、ごめんっ」

直樹はぱっと手を離れた。ふくらみかけの乳房は、少し触れただけでも悲鳴をあげるほど痛むというのは、エロ雑誌で読みかじって知っている。

だが、薔子のような成熟した肢体の持ち主でも乳房が痛むとは思わなかった。

「い、いいの……気持ちがいいから……」

——痛いのに気持ちがいい？

お嬢様をいっぱいイジってみたいのだが、痛いと言われると申しわけなくなつてし

まう。それでいて、アレコレ触ってみたい気持ちはふくらむばかりだ。

「ごめん。ど、どうしていいかわからない」

「さ、触って……そっと……」

お嬢様は、ドレスの胸もとを折り曲げるようにして右の乳房を露出させてしまった。ドレスの赤と乳房の白の対比が魅力的だ。まるで薔薇の花びらを剥いて花芯をさらしたようだ。

大きなおっぱいだとは思っていたが、これでも着やせしていたらしい。まるで、メロンを三分の一ほど切り落として胸の上に置いたみたいだ。綺麗な円形をして、ふんわりと盛りあがっている。乳輪は桜色で、乳首はやや色が濃くかわいらしいピンク色をしている。

「こっち側のおっぱいも見えていい？」

「だ、だめ、左は……」

——右はいいのに左はダメ？

直樹は首をひねるばかりだ。だが、いやがることをわざとするつもりはなかったのだ、お嬢様の横に膝をつく、横座りになっている薔子のドレスの胸に手を入れて、そっとそっと乳房を揉む。